

『島とバーバーと絵日記』

大間貴昭

あらずじ
生まれてから一度も島の外で暮らしたこ
とのない桐野柚香（28）は、足が悪く、車
いすの母・真理子が営む島の理容室『バーバ
ーキリノ』の手伝いをしている。柚香は母と
二人の生活に幸せを感じていたが、店を継ぐ
ことを真理子から求められ、もやもやした感
情を抱えていた。柚香は真理子が一人でも外
出できるようと家のある階段にスロー
プをつけることを思いつく。しかしそれには
貯金が足りなかった。

ある日、柚香の妹の桃が島に帰ってくる。
桃は真理子の過干渉ぶりにうんざりし家出を
したきり8年間音沙汰もなかった。そんな二
人は再会するなり口喧嘩を始めるが、ひょん
なことから柚香は牡蠣剥きのバイトをするこ
とに。何かに夢中になると周りが見えなくな
る柚香は牡蠣剥きも丁寧にやりすぎてしま
い、仕事にならなかった。

柚香は桃から一緒に島を出ようと提案され
る。嬉しく思う一方で、自分がバーバーを継
ぎたくないと思っていることに気付く柚香。
さらに、柚香のもとにイラストの仕事の依頼
がある。柚香が毎日描いていた絵日記がSN
Sで話題になったのである。柚香は幼いこ
ろ、絵描きになるのが夢だった。

一方、真理子からは、客の自宅に訪問して
髪を切る訪問理容をやってほしいと頼まれ
る。バーバーは赤字続きで、店を続けるため
にはやらなければならぬ。足の悪い真理子
にはできない。柚香の心は揺れる。実は真理
子の足の障害は柚香を事故から守るときに
きたもので、柚香は負い目を感じていた。

母とバーバーを続けるか、自分の夢を追う
のか。迷う柚香だったが、牡蠣剥きの作業中
に手を怪我してしまい、バイトをクビにな

る。落ち込む柚香を励ましてくれたのは真理子だった。柚香は自分のことしか考えていなかったことを恥じ、バーバーを続ける決意をする。

しかし、それが本心でないことに真理子は気付いていた。真理子は柚香のことを、いつまでも子どものままだと思っていた。しかし、懸命に介助する姿に、成長を感じていた。真理子は柚香と事故のことについて話し、今までの感謝を伝える。

柚香は夢を叶えるために、島から離れることを決める。

人物

桐野 柚香 (28・8)

バーバーキリノ手伝い

桐野 真理子 (52・32)

バーバーキリノ店主、柚香の母

桐野 桃 (26)

柚香の妹

桐野 波留 (5)

桃の息子

只野 恭平 (52)

只野なんでも屋店主

島田 喜代 (76)

牡蠣の剥き子

ゲン (65)

浦井 (52)

工藤 (48)

客

子ども A

子ども B

泥酔客

学芸員

○離島・俯瞰

海に浮かぶ離島。
丘の上には、小さく古い建物。
『バーバーキリノ』と看板が出ている。

○バーバーキリノ・ベランダ

港が一望できるベランダ。
桐野柚香（28）、じょうろ片手に部屋
から出てきて、鉢植えに水をやる。
子どもっぽい装い。可愛らしい小さな
ポシェットを肩からかけている。
爽やかな海風が髪を揺らす。
ぐーっと伸びをする柚香。
野良猫がやって来て手すりに座る。
猫を撫でて

柚香「この景色、ほんと昔から変わらんねえ。
潮の匂いも。風の音も」
ニヤーと鳴く野良猫。

港からは連絡船が出航する。
ポーと汽笛が響く。

柚香「誰かを呼んどうるみたい」
連絡船、入り江を出ていく。

真理子の声「ゆずかー」

柚香「うちも連れていってくれ……」
真理子の声「柚香ー！」

柚香「あ、はい！」

メインタイトル

『島とバーバーと絵日記』

○同・店内

こじんまりとした昔ながらの理容室。
桐野真理子（52）、脚立の上に座りな
がら客の髪をカットしている。
脇には車いすが置かれている。

柚香「ごめんごめん」

柚香、急いで真理子のもとへ。

両手で真理子を持ち上げ、脚立から下
ろして車いすに乗せる。

客「よくできた娘さんやねえ」

真理子「もう手慣れたもんやな」

柚香「10年以上やったりますけん。ほら、

筋肉もつきましたったい」

柚香「二の腕をまくって見せる。」

客「あら、将来は2代目かしら」

真理子「もうちよつとしたら勉強始めさせよ

うかなと思つとるんですよ、なあ？」

柚香「え？ は、はい」

○同・表（夕）

『CLOSED』の張り紙。

○同・店内（夕）

レジの真理子、難しい顔でお金の計算
をしている。

真理子「うーん……」

柚香「買い物袋を持って玄関へ。」

段ボールに詰められた大量のみかんを
発見。

柚香「うわあ、これ今朝届いたん？」

「つ、手に取る。」

真理子「そうやよ。柚香の好きなやつやろ」

柚香「こいつはおいしそうや。いい色しよる

し。匂いもよかあ。こげんあれば剥いて食

べて、ジャムにして」

真理子「商店行くと？」

柚香「そうやよ」

真理子「財布は持ったか？」

柚香「うん」

真理子「ちやんとお金は入つとるやろうな？

あ、ポイントカードも、携帯も忘れんよう

にな。寄り道せんですぐ帰つてきんしやい

ね」

柚香「そげん心配せんでよかよ」

柚香「ため息をつき

ん……あのさ、うち、理容師の勉強する

ん？」

真理子「そう考えとる」

柚香「なんでよ」

真理子「そりゃあ、あんたのためや。ここで働くんがよか。そう思うやろ？」

柚香「まあ」

真理子「大丈夫、おかんの言う通りにすれば、全部うまくいくけん」

真理子、笑う。

柚香「そうやね」

柚香、作った笑顔で応える。

○道（夕）

夕焼けに照らされる道。

柚香、スキップしたり鼻歌を歌ったり。

道の脇には『島神様』の石像。

柚香「今日もこの島は綺麗や。ありがとうございませう」

パンツと手を合わせる。

道の向こうにゲン（65）。ポロポロの服、靴は穴が開いている。

子どもたちがゲンに石を投げている。

子どもA「くっさ！」

子どもB「この島から出てけよ」

柚香、止めに入る。

柚香「あんたたち、やめ！」

子どもA「なんだ、マヌケ桐野か」

柚香「マヌケって言う方がマヌケや」

子どもB「うちらそいつ退治しとるんや、邪魔すんな」

柚香「なんでゲンさん退治するん」

子どもA「そげんほーろー者、邪魔やけん」

子どもB「ほーろーしや？」

子どもA「ほーろー…ほーろー…ほーろー…」

柚香「浮浪者や！」

ゲン「…」

柚香「あ、ごめん、ゲンさん」

子どもA「もういいや、テンション下がった

わ。行こうぜ」

子ども二人、去っていく。

柚香「大丈夫？」

ゲン「ああ、悪いねえ」

柚香「なんでみんなゲンさんをいじめるんや」

柚香「なんでみんなゲンさんをいじめるんや」

ゲン「こげん見た目やけんな」
柚香「なんや、うちは嫌いやなかよ。ちよつと変わつとるけど。あ、そうや」

柚香、ポシエットから色鉛筆と日記帳を取り出す。

ゲン「また絵日記かい？」

柚香「そうや、久しぶりに会った記念や。い

いか？」

ゲン「もちろん」

絵を描き始める柚香。一本一本の線を時間をかけて引いていく。たくさんの種類の色鉛筆を使って丁寧にグラデーションをつけていく。

○バーバークリノ・リビング（夕）

真理子、携帯をいじっている。

柚香の位置をGPSで探す。

真理子「またや：：」

○道（夕）

辺りはもう薄暗くなってきた。

ゲンはうとうとしている。

絵が完成。鮮やかで幻想的なゲンの肖像画である。

柚香「うん、よかよか」

柚香、満足げな表情。

携帯が鳴る。

柚香「あ！」

真理子から『また道草食つとるんか』

とメール。

ゲン「どうしたと？」

柚香「ごめんゲンさん、またね」

柚香、慌てて商店へ。

○商店・表（夕）

シャッターが閉まった商店。

立ち尽くす柚香。

柚香「ありやあ：：ん？」

商店の横には新しい美容室。客で賑わっている。

○バーバキリノ・店内（日変わり）

真理子が客の浦井（52）の髪を切つて
ている。

爆笑している真理子。

浦井「で、夕飯みかんしか食べよらんかった
と？」

真理子「そうなんよ」

遠くから見ている柚香。

柚香「ごめんなさい」

真理子「ほんま、うちの言うこと聞かんけん
ねえ」

柚香「（ムツとして）……」

○同・表

柚香、カットを終えた浦井を見送る。

柚香「ありがとうございました」

浦井「柚香ちゃんさ、この島に神様がおるつ
て知つとる？」

柚香「島神様ですね。そこに石像があります
けん」

浦井「今も島のどこかで生きとるとか」

柚香「本物の神様の前でお祈りをすると願
いが叶うとか」

浦井「ほんと、あほらし」

柚香「え……」

浦井、スマホを取り出して柚香に写真
を見せる。コミカルなポーズをとる男。

浦井「どうや。これ、息子。福岡の市役所で
働いとる」

柚香「へえ」

浦井「こげんチャンスなかよ。安定した地位
と並みの顔。絵に描いたような優良物件や」

柚香「物件？」

浦井「いいか、柚香ちゃん。こげん嘘くさい
伝説が残る、さびれた島にいても幸せなん
か見つからん。外に出んといかん。ほら、
な、どうや？ な？」

柚香、圧に押されて苦笑い。

柚香「うち、どうせ島から出られん。おかん

もおるけん」

浦井「（我に返って）あ、すまん、すまん。うちの悪い癖や。お節介やったな」

二人、階段を下りる。

浦井「いつも思うんやけど、この階段、おかんはどうしとるん？」

柚香「うちがおんぶしとります」

浦井「そりや大変やろう。スロープでもあればおかんも一人で出かけられるんにな」

柚香「スロープ……」

浦井「あ、こりやまたお節介やったな。じゃ、また」

浦井、島神様の石像に手をあわせ、『息子がいい人と出会えますように』とぶつぶつ願っている。

柚香、階段を見つめて

柚香「スロープかあ」

○同・柚香の部屋

柚香、タンスを開けてブリキの箱を取り出す。中には大量のポチ袋。

柚香「コツコツ貯めといて正解や」
一つずつ中身を出してお金を数えていく。

× × ×

柚香「44万……」
お札の山が出来ている。数え終えた。

○同・リビング

柚香、玄関へと向かう。

真理子「どこ行くん？」

柚香「只野さんのところ」

真理子「只野さん？」

真理子、慌ててキッチンへ。

真理子「何か持って行かんと」

柚香「おかんも行く？」

柚香、ニヤニヤ。

真理子、顔を赤らめて

真理子「行かん」

柚香「（いたずらっぽく）彼女いるか聞かんで

いいと？」
真理子「馬鹿」

○只野なんでも屋・表
『只野なんでも屋』と看板のあるプレ
ハブの店。
やって来る柚香。
店の中には只野恭平（52）。派手な衣
装を着てダンスを踊っている。
とてつもなくダサイ。

○同・店内

店内に入る柚香。

只野「お、柚ちゃん」

柚香「何やっとなると？」

只野「チツクトツクや」

柚香「チツク：：？」

只野「何や、知らんと？　こうやって動画を

撮影してな、たくさんの人に見てもらうん

や」

柚香「はあー。只野さん、なんかカニみたい

やね」

只野「なんやと！　これでも昔は『離島のマ

イケルジャクソン』言われとったんや」

柚香「へえー、ようわからんけど、元氣そう

でよかったわ。いつになったら店来てくれ

るんですか」

只野「まず髪を生やすところから始めんとい

けんね」

帽子をとると、つるつるの禿げ頭。

柚香「あ、こりやこりや」

只野「踊りをやめ

只野「で、今日は？」

柚香「お仕事をお願いしたいとです」

只野「何の？」

柚香「スロープを作って欲しいと」

只野「スロープ？　どこに」

柚香「うちの前の階段のところや」

只野「ああ、あそこな」

柚香「スロープがあればおかんも一人で出か

けられる。只野さんにも会いに行ける」

只野「え？」

柚香「あ、いえ。できますかね？」

只野「値段次第だねえ」

柚香「なるべく安くお願いします」

只野「まあ……50くらいかな」

柚香「50……円？」

只野「万」

○漁港・加工場

柚香「あと6万……」

柚香、水産加工場を見て回る。

様々な魚が作業員によって捌かれたり、干されたりしている。

柚香「あの、バイトってありませんか？」

と聞くと、首を横に振られる。

そのとき。

女性の声「てめえ！ またぼーとしやがって！」

と怒号。

近く建物から若い女性が飛び出してきて、柚香の横を走り去っていく。号泣

柚香「……大丈夫かね」

建物の中を覗くと、牡蠣の殻剥きが行

われている。

柚香「……」

興味津々で見つめる柚香。

すると背後から

女性の声「お姉」

柚香「？」

派手な柄のシャツを着た金髪サングラスの女、小さな男の子の手を引いて立

っている。

柚香「誰かいな」

女「わからんか。ずっと会つたらんもんな」

女、サングラスを外す。

柚香「……桃ちゃん？」

柚香の妹・桐野桃（26）と息子の桐

野波留（5）である。

桃「そうや」
柚香「桃ちゃん！」
柚香「全然わからんかったよ。かつこよくな
ったねえ。何年ぶりやろうか」
桃「高校のとき以来やから：：数えんのも面
倒やわ。あと、その呼び方やめ」
柚香「桃ちゃんはずつと桃ちゃんや」
桃「大人には恥ずいわ」
柚香「このおちびちゃんは？」
桃「波留。ほら、あいさつ」
波留「初めまして」
柚香「初めまして。かわいいねえ」
柚香「波留、波留の頭を撫でる。」
波留「怖がって桃に抱き着く。」
柚香「あら。緊張しとらんか」
波留「緊張なんかしとらん：：しとらんわ」
桃「こいつ、強がるとき、二回言うんよ」
柚香「なんと。かわいかあ」
波留「そんなことなか：：なか」
波留、桃の陰に隠れてしまう。

○バーキリノ・店内

真理子「高齡者の恋愛必勝法」。
『先は短い！ 積極的に行動せよ！』
などと書かれていた。
真理子「なるほど：：」
柚香「興奮して帰ってくる。」
真理子「大事件や！ おかん！」
柚香「帰ってきたと！」
桃「玄関には桃と波留。」
真理子「：：」
驚く真理子。が、すぐに何もなかった
かのように雑誌を読み始める。
真理子「なんや。髪でも切りに来たか」
桃「違うよ。可愛い娘が帰ってきましたよ」
真理子「うちには娘は一人しかいません」

桃「ひどいわあ」
真理子「あんた誰や」

真理子「おかん、雑誌を置いて店の奥へ。」

桃「まあ予想通りや」

○同・食卓（夜）

赤飯など豪華な夕飯。

桃香、用意している。

真理子、桃、波留はじっと黙って待っている。

真理子「何のお祝いやね」

桃香「桃ちゃんが帰って来たけん。これくらいしてあげんとね」

桃香、席に着く。

桃香「じゃあ、いただきます！」

桃、箸を手取る。

真理子「何しとる」

桃「飯出されたら食わんと」

真理子「よそに行け、泥棒」

桃「まあ落ち着き」

桃香「泥棒？」

真理子「こいつ、家出したとき、うちの10万勝手に持って行きよった」

桃香「そうなん？」

桃「しょうがなかるう。金がないと生きていけない」

真理子「野垂れ死ねばよかったんに」

桃「言葉きついわ」

真理子「そんだけやない。専門学校の入学金も振り込んだのに、逃げたけん、全部ドブに捨てることになった」

桃「そげん昔のこと」

真理子「昔のことやって？ こっちは恩をあらだて返された気分や。どうせ帰ってきたのもそげなとこやろ、金や」

桃「かわいい孫の顔、見たくないん？ ほら、ばあばだよ」

真理子、波留に笑顔を見せる。

波留、真理子を見るなり、怖がって桃

に抱き着く。
波留「怖い、悪魔」
真理子「悪魔……」
柚香「はは」
真理子「笑うな」
桃「（波留に）違うやろ。練習の通りやって」
真理子「練習？」
波留「おばあは悪魔だって、おかんがいつも
言いよる」
真理子「あんた……」
桃「ちっ。まあ孫の顔が見ただけでも良かったやん。うちが帰ってこなかったら一生
縁がなかったやろうに」
真理子「柚香もおる」
柚香「うちは嬉しいわ。立派になった桃ちゃんを見れたけん」
真理子「これのどこが立派や」
桃「どう見てもやろ」
真理子「ふざけんで！ 何しに来たん？」
桃、箸を置き、頭を下げた
桃「お金を貸してほしい」
真理子「ほらやっぱり」
桃「50万でよか」
柚香「ごめん、今44万しかなくて」
真理子「貸さんでよか。何の金やの」
桃「何の金でもいいやろ」
真理子「よくない」
桃「なら30でいい」
真理子「だめに決まっとる」
桃「殺生な。家族やろ」
真理子「それを捨てたのはどこのどいつか。都合のいいときだけ家族づらしよって。根性腐つとる。さっきなんて波留くんをだしに使おうとしよったやろ」
桃「バレた？」
真理子「父親は？」
桃「今は会えん」
真理子「なんで」
桃「言えん」
真理子「何も言えんのか……どうせろくでも

ないやつやろ。完全アウトや」
桃「アウトやと？」
真理子「そうや、アウトやろ。子ども作って責任も持てんクズ」
桃「そげん言うなら、あんたやってアウトやろ」
真理子「何が」
桃「超がつく過保護」
真理子「なんやと」
桃「専門学校もあんたが勝手に決めたやろ。うちの意見も聞かずに。うちはバーバーなんて継ぎたくなかった。入学金をドブに捨てた？ 自業自得やろ」
真理子「うちはあんたのために」
桃「出た出たそのセリフ。過保護、過干渉の典型や」
真理子「く……」
柚香「二人とも……」
真理子「そげん金が欲しいなら自分で稼ぎ」
桃「なにしとるん」
真理子「あ、もしもし、島田さん？ 人手必要なんやろ？ うちに一匹おるけん。うん。そんじやあよろしく」
電話を切る。
桃「なんね」
真理子「牡蠣剥きのバイトや」
桃「牡蠣剥き！？ いやや、あんなパワハラバイト」
真理子「何を人聞きの悪い」
桃「学生んときの友達、みんなどぎつく叱られて、泣いて帰って来よったわ」
真理子「もう申し込んでしまったわ」
桃「あんたが行け」
真理子「うちはここがある」
桃「こんな床屋、もう潰れるやろ」
真理子「潰れんわ。あんたは根性叩き直してもらって来い」
桃「嫌じゃ」

再びにらみ合う二人。

柚香「……あの、うち行きたいわ」

真理子「は？」

柚香「牡蠣剥き、行きたい」

桃「いいん？」

真理子「冗談はいいんよ、柚香」

柚香「冗談で言うたらんよ。バイト、行きた

い。おかん、お願い」

真理子「あんたには難しい」

桃「まーた過保護が始まったわ。何がや」

真理子「あそこは厳しい。耐えられんけん。

それに柚香はまだここ以外の仕事したこと

ないし」

桃「だれやって初めてはある」

真理子「でもな」

柚香「頭を下げる。

真理子「お願いします」

○牡蠣処理場・外観（日変わり）
大量の牡蠣が運ばれてくる。

○同・事務所

柚香、工藤（４８）から面接を受けている。

工藤「牡蠣は好きか？」

柚香「……」

柚香、奥に見える牡蠣剥きの作業に
ぎ付けである。

工藤「おい、あんた」

柚香「あ、はい」

工藤「牡蠣は好きかって聞いとるんや」

柚香「はい、好きです」

工藤「ちやちやつと答えんかい、このノロマ。
で、なんや、どこが好きなんや。やっぱり

あの苦いところか」

柚香「昔、貝殻がよく波止場に落ちとって、
いろんな色がキラキラしててたまらん好き

やったとです。あれはいったい何色あるんやろうか」

工藤「……まあいいわ。うちは基本給にプラス歩合や。多く剥けば給料高くなるけん、頑張り」

喜代「いつまでくっちゃべつとるんじや！」
作業服姿の島田喜代（76）が入って来る。

喜代「はよ残りの牡蠣運ばんかい、このあほんだらあ！」

工藤「すみません！」
慌てて立ち上がる工藤。

喜代「お前の脳天腐つとるやろ。牡蠣みたいに剥いて確かめてやろうか！」

喜代、牡蠣剥きのナイフを工藤の喉元に当てる。

工藤「すみません……」
袖香、驚いて固まっている。

喜代、袖香に気付く。

喜代「あら、桐野さんとこの？」

袖香「あ、初めまして、桐野袖香です」

喜代「島田や。よろしくな」

喜代、出ていく。

袖香「……」

工藤「ほぼヤクザやろ」

袖香「ええ」

喜代の声「はよせい！」

工藤「今、行きます！ あ、ちよつと出てくるから、これ見ておいてくれる？」

工藤、袖香にパンフレットを渡す。

タイトルは『ムキ子のお仕事』。

表紙には『ムキ子』という絶妙にださいゆるキャラが描かれている。

○バーバーキリノ・店内

真理子、高齡の客に抱えられ、脚立の上へ。

へろへろの客。

真理子「ほんと、すまんなあ」

○同・台所

真理子、冷蔵庫を漁っている。
麦茶を取ろうと手を伸ばすが、届かない。

真理子「柚香―、柚香―」

返事がない。

真理子「そうやったわ」

真理子、必死で手を伸ばす。

そこに波留、やってくる。

真理子「お、波留くん。桃は？」

波留、首を振る。

波留「どっか行った」

波留、椅子の上に乗って冷蔵庫の麦茶を取り、真理子に渡す。

真理子「ありがとう」

波留、手のひらを差し出し

波留「お金」

真理子「金？」

波留「おかんに言われた。手伝って金をせび

ってこいつて」

真理子「あのくず」

波留「お金、くれ」

真理子「無理や。世の中そげん甘くなか」

波留「悪魔」

真理子「……」

波留「悪魔や！」

真理子「そうや、わしは悪魔じゃ！」

真理子、うめき声をあげる。

波留、悲鳴を上げて逃げていく。

○同・表

玄関から飛び出してくる波留。追う真理子。

真理子「うおー！」

波留、階段を下りていく。

真理子、それ以上は追いかけられない。

真理子「うおー！！」

波留、立ち止まり、振り返る。

階段の上から空しく雄叫びを上げ続ける真理子。

波留「……」

× × ×

真理子「二人、玄関先で麦茶を飲んでる。

の道具と思つとるんか」

波留「別によか。おかんは仕事頑張つとるけ

ん、うちも手伝いたい」

真理子「桃はそげん忙しいん？」

波留「おかんは夕方から仕事に行くんや。そ

んで朝帰つて来てすぐ寝る。そんでまた夕

方から仕事に行く」

真理子「なんや、ほとんど家におらんのか。

ほんとに大丈夫なんか」

波留「悪魔はずつとここにおるんか」

真理子「そうや」

波留「その足……」

真理子「これか？ ケガしたんや昔。交通事

故。軽トラとぶつかつてな。うちがぼーっ

としとつてなあ。自業自得やねえ」

波留「ジゴウジトク？」

真理子「自分が悪かつたつてこと」

波留「そうなん？」

真理子「そうや」

波留「悪魔がケガをしたのは、柚ねえのせい

やつて、おかんが言つとつた」

真理子「……」

○道

柚香、鼻歌を歌いながら歩いてる。

島神様の石像の前を通る。

柚香「お、島神様にいいもん見せたる」

封筒を取り出し、中のお札を数える。

六千円である。

柚香「初任給や」

どや顔の柚香。

玄関先の真理子、柚香を見つけるや否

や駆け付ける。

真理子「バイト、どうやった？ 大丈夫か？

怒られんかったか！？ 殺されんかった

か！？」

柚香「おかん、うち生きとる」
真理子「そうか。よかったなあ。まあ、まだ
初日やけん、気は抜けん」
呆れる柚香。

○バーバーキリノ・リビング（夜）

風呂上がりの柚香。

縁側には波留。外をぼーっと見ている。

柚香「……」

柚香、波留の隣に腰掛ける。

柚香「おかん、遅いなあ」

波留「どうせ帰って来ん」

柚香「大丈夫や、帰ってくる」

波留「おかん、うちによく『早く大人になれ』
って言うけん、一人でどうにかせんといか
んのや。まだ5歳やのに」

柚香「桃ちゃんらしいわ」

波留「なにが」

柚香「桃ちゃん、『早く大人になって島から出
ていきたい』ってよう言っとったんよ。小
学生のころなんてな、泳いで向こう岸まで
渡ろうとしたこともあった」

波留「泳げたん？」

柚香「すぐ溺れよったわ。桃ちゃん全然泳げ
んかったけん。あほやろ？」

波留「あほやな」

柚香「寂しいん？」

波留「寂しくなんてなか……寂しくなんてな
か」

柚香「……」

○同・寝室（夜）

波留、スヤスヤと寝ている。

ドアの隙間から見ている柚香。

○港町・飲み屋通り（夜）

スナックや居酒屋が立ち並ぶ通り。

柚香、びくびくしながら歩いている。

居酒屋の窓から店内を覗くと、漁師た

ちが盛り上がっている。

柚香「おお……」

隣のスナックから客が出てくる。泥酔していて足元はフラフラ。地べたにペタンと座ってしまう。

柚香、心配そうに近寄る。

柚香「あの、大丈夫ですか……？」

泥酔客「まだ飲ませるとお？ 桃ちゃあん」

柚香「え？」

スナックから桃が出てくる。ど派手な格好。

柚香「桃ちゃん！」

桃「お姉？ 何やっとなん？」

柚香「探しに来たんよ。何しよう？」

桃「仕事やよ」

桃、泥酔客の肩を叩いて

桃「お客さん、まだお会計してませんよー。

食い逃げになっちゃいますよー」

泥酔客「食い逃げ？ ならさあ、桃ちゃんも

一緒に警察に行こうよお」

桃「お一人でどーぞ」

桃、泥酔客の頬をペシペシと叩く。意識はもうろう。

桃「うちが興味あるんはそのサツやない」

客のカバンから財布を取り出して、お金を抜き取る。

桃「このサツや」

柚香「……」

数枚を自分のポケットに入れる。

桃「そろそろ終わるけん、待っといて」

桃、スナックに戻っていく。

柚香「うん……」

○道（夜）

二人、歩いている。

柚香「ああいうん、向こうでもやっとなん？」

桃「やっとなんよ。稼ぎがいいけん。なんや、

驚いたか」

柚香「桃ちゃん、ほんとに変わったけん」

桃「そうやろ？ いろんなバイトしたし、両

手じゃ数えられんくらい男と付き合っ
た。子ども生まれ来て、育児もやった」

柚香「たくさん経験したんや」

桃「そうや。島から出て学んだんよ。楽しい
こと、苦しいこと、たくさん経験すると、
どんどん人生が色鮮やかになっていくん
や。この島で生きとる限りモノクロや」

バーバーが見えてくる。

桃「なあ、うち、お姉に話すことある」

桃、財布の中から一枚の紙を取り出す。
虹色の空を飛ぶ一羽のカモメが描かれ
ている。女の子がカモメの背中に乗っ
ている。

桃「これ、覚えとる？」

柚香「家出した日にあげたやつや。まだ持っ
とったと？」

桃「もちろんや。うちのお守りや。これを見
るたび、自由に生きてほしいってお姉に言
われたのを思い出す」

柚香「そうやった」

桃「次はお姉の番や。一緒に島の外に出よう」

柚香「え……」

驚く柚香。

桃「こんな島、脱出するんや。お姉もそうし
たいやろ？」

柚香「……けど、おかんはどうするん？」

桃「放つとき。車いすで一人暮らししてるや
つなんかたくさんおる。心配せんでよか」

柚香「でも、バーバーもあるけん」

桃「バーバーはもうダメや」

柚香「なにがよ」

桃「経営が厳しいやろ。新しい美容院が町の
方にできて、客が取られとるんやないか。
毎月、何人客来とるん」

柚香「20人とかかな」

桃「そんな二人の生活費も稼げとらんやな
いの。バイトした方がましや」

階段の下に到着。

桃「うちはな、お姉に感謝しとる。家出も手
伝ってくれたし、おかんのことも全部まか

せつきりや。それに自分勝手なうちを許してくれる。こんな優しい姉は他におらん」

柚香「なんね、当たり前や」

桃「お姉には幸せになって欲しい。この島におつたら無理や。ここから出て幸せと一緒に探さんや」

と、言い、道を引き返していく。

柚香「どこ行くと？」

桃「波留のことよろしくー」

行ってしまう桃。

柚香「……ほんと、自由やなあ」

○スナック『セピア』・店内（夜）

閉店後の店内。浦井がコップを洗っている。

帰ってくる桃。

浦井「どうやった？ うまくいった？」

桃「強敵やな」

浦井「柚香ちゃん優しいけんねえ。ほんと、

息子とくっついてくれんかね」

桃、水を飲む。

桃「優しいだけならいいんやけどな」

浦井「他に何かあるん？」

桃「おかんの足、お姉をかばってケガをした

んや」

浦井「あの足？ 真理子から事故って聞いた

ったけど」

桃「まあそうや。昔からお姉はぼーっとして

ってな。その事故の時も道の真ん中でぼー

っと突っ立っとな。そこに車が来たんや。

間一髪でおかさんが助けたんやけど、足をは

ねられて、歩けんくなっただんや」

浦井「そうやったんか」

桃「あれからお姉はおかんの近くから離れん

くなつたし、おかんはうちらを監視するよ

うになつた。もう20年も前の話やけどな」

桃、カモメのイラストを取り出す。

桃「お姉が夢のことを話さんようになったの

もあれからや」

イラストを携帯で撮影する。

○バーキリノ・店内（日変わり）

真理子、険しい表情で家計簿をつけている。

今月の売り上げ8万円、障害手当3万円、生活費7万円、家のローン5万円、柚香の入学資金5万円。

6万円の赤字。

真理子「はあ」

柚香、遠くから心配そうに見ている。

真理子「柚香」

柚香「なに？」

真理子「ちよっと相談があるんやけど」

柚香「うん」

真理子「4月から、学校通ってもらわ」

柚香「え、早くない？」

真理子「すまん、ちよっと最近客が離れて

しまつててな。早めに資格をとってほしい

んや」

柚香「うちが理容師になっても客は増えんと

思うけど」

真理子「柚香には訪問理容をやってもらう」

柚香「訪問？」

真理子「客の家まで行って髪を切るんや。島

には家から出れん高齢の人が多し。そうい

う客を取り込むんや。バーバーが生き残る

にはそれしかない」

柚香「そうか」

真理子「うちにはできん。柚香にしかできん

ことや」

柚香「うん…じゃあ、バイト行ってくる」

柚香、笑顔を見せ、出ていく。

○牡蠣処理場・作業場

牡蠣の殻剥きが行われている。

柚香の隣で喜代が猛スピードで剥いて

いく。

柚香「すごか…」

柚香、不器用な手つきでようやく一つ

を終える。

柚香「ふう」

喜代「『ふう』やない！ その牡蠣、身が傷つ
いとるやろ。よく見い！」

柚香「すみません」

喜代「三日目でまだ一つも商品にならつたら
ん！ こげん覚えが悪いやつ初めてだ。や
る気あるんか！？」

柚香「あります：：」

縮こまる柚香。

喜代「ほら、見とけ」

喜代、殻剥きを柚香に見せる。

喜代「いいか、ナイフを殻に刺すやろ？ そ
れで貝柱を切る。この時、殻を動かすんや。
お前はナイフを動かしとる。そうすると身
が傷つく。ほら、やってみろ」

柚香「はい」

柚香、ナイフを受け取り、牡蠣を剥く。

喜代「いいか。牡蠣は同じように見えて一つ
一つ違うんだ。性格がある」

柚香「性格？」

喜代、牡蠣を手に取り

喜代「こいつは強情っぱりだ。びしっと殻が
強く引っ付いとる。そんで、こいつは引っ
込み思案や。貝柱が奥にある。百通りの性
格、剥き方も百通りや」

柚香「へえ、面白かですね！」

喜代「面白がらんでよか！」

× × ×

昼休憩。

剥き子たち、弁当を食べている中、柚
香は日記に牡蠣をスケッチしている。

喜代、柚香のもとにやって来る。

喜代「飯食わんと体力持たんぞ」

柚香「すみません、あと少しなんです」

喜代、柚香の隣に腰を下ろす。

喜代「大変か、仕事」

柚香「まあそうですねえ。けどこうやって絵
を描いてると忘れます」

喜代「教えたことまで忘れんなよ」

柚香「わかつとります」

色を付けていく柚香。

喜代「なかなかうまか」

柚香「牡蠣の絵を描いとります」

喜代「絵描きにでもなりたいんか」

柚香「いやー、それは無理です。誰かに習っ

たこともないし、島のものしか描いたこと

ないし。そもそも趣味やけん」

喜代「そうか」

柚香「あ、そういえば、パンフレットに『ム

キ子』とかいうゆるキャラおりましたね」

喜代「それがどうした」

柚香「あれ見て、笑ってしまっただです」

喜代の顔が引きつる。

柚香「あれはなんやるか。幽霊やるか」

喜代「そげなこと気にするな！ さっさと飯

食え！」

去っていく喜代。

柚香「え……」

遠くで二人を見ていた工藤、にやにや

しながらやって来る。

工藤「やっちゃったねえ」

柚香「何がですか」

工藤「ムキ子のデザインしたの、島田さんや

けん」

柚香「え！？」

工藤「なんかどうしてもやりたいつて言い張

って。そげん言うなら上手いんやと思つた

けどなあ。いやースカッとしたわ。ありが

とな」

柚香「うわあ」

顔を抑える柚香。

○同・事務所

工藤、剥き子に日給を渡している。

ベテランたちは一万円近くもらつてい

るが、柚香はたったの2千円。

柚香「え、少な」

工藤「歩合やって言つたやろ。もつとほしけ

りやもつと剥かんと」

柚香「……わかりました」

○只野なんでも屋・店内
柚香「55万……」
只野「おかんの車いすが通れる幅を考えたら
な、ちよつと必要になった」
柚香「あの、なんか稼げるバイトって知らん？
今日2千円しかももらえんかったんよ」
只野「知らんよ」
柚香「なんでも屋なんに？」
只野「なんでも知ってるわけと違う。まあ仕
事として依頼してくれるなら調査するけ
ど。お金は払ってもらわんと」
柚香「……ケチ」
只野「なんや、おかんに頼めばいいやろ」
柚香「おかんはこのことを知らんけん」
只野「なんでや。サプライズか」
柚香「ちがう。知られたくない」
只野「喜ぶやろうに。母親思いの娘や」
柚香「……うちはそげんと違う」
只野「何が？」
柚香「このスロープはな、おかんのためやな
い。うちのためや。うちがどっか行っても
いいように作つとるんや」
只野「島から出るんか？」
柚香「決めとらん。けど、昨日桃ちゃんに一
緒に島から出ようって言われた時、すごく
嬉しかった。で、そんな時気付いた。うちは
な……本当は、バーバーを継ぎたくないん
や」
只野「なんや、やりたいことがあるんか？」
柚香「わからん。ただ反抗してるだけかもし
れん。ただのわがままなんかも。ダメな娘
や」
只野「よかよ、わがままでも」
柚香「いいわけない。おかんを困らせるだけ
や。只野さんも知つとるやろ？ おかんが
歩けんのは、うちのせいや。うちがしつか
りしとけば、おかんだってもつとやりたい
ことをできたはずや。全部うちのせいやの

におかんを見捨てるなんて、最悪に決まっ
とる」

只野「……」

柚香「ごめん」

只野「おかんは待ってるんかもしれんよ」

柚香「何を？」

只野「柚香ちゃんがわがままを言ってくれる
のを」

柚香「……」

柚香、少し考えて

柚香「あ、そうや！」

只野「何？」

柚香「調べてくれませんか？」

只野「何を？」

柚香「今只野さんが言ってたこと。おかに
聞いてもらえませんか？ お金払えばよ
か

ですよね？ ねえ？」

ぐいぐいと前のめりの柚香。

只野「まあ、でも金は？」

柚香「そうやった……」

○牡蠣処理場・作業場

必死に牡蠣剥きをする柚香。

他のベテランたちは数十個と剥いてい
るが、柚香はまだ一つ目。

工藤、あきれ顔で見ている。

柚香「ふうー」

工藤「『ふうー』やなか！ どげん時間かかっ
とるん！？」

柚香「すみません、計ってなくて」

工藤「あほ！ 時間は計らなくてもよか！」

柚香「すみません」

工藤「あーもー、ほんと使えんわ。また新し
いバイト探さんといけんやないか」

ぶつくさ言いながら去る工藤。

隣で作業をしていた喜代、柚香の剥い
た牡蠣を取り上げ、仕上がりを確認す
る。

喜代「きれいに剥けとるやないの。合格」

柚香「え？」

喜代「合格。その調子や」
喜代、作業に戻る。
柚香「……ありがとうございます」

○道

帰り道。

柚香、封筒のお金を確認する。2千円と、500円玉。

柚香「この調子や」

道の向こうにゲンの姿。森の中に入っていく。

柚香「ゲンさん……？」

柚香、追う。

○森

けもの道を進んでいくゲン。
追う柚香。

○森・祠

祠の中に入っていくゲン。
横になり、すぐにいびきをかいて寝始める。

物陰から見つめている柚香。
柚香「島神様……？」

○バーバーキリノ・表

只野、やってくる。

○同・店内

レジの金を数えている真理子。
店のドアが開く。

真理子「もう閉店です」

只野「久しぶり」

真理子「あ、ひ、久しぶり」
慌てふためく真理子。

真理子「（小声で）積極的……積極的……」

只野「ん？」

真理子「あー何でもないけん。で、何しに来たん？ なんや、髪切って行くんか？」

只野「どうやって？」

只野、頭を触る。
真理子「……秃げとる」

只野「ストリートやな」

真理子「あ、すまん」
只野「そうやってズバズバ言うの、昔と変わらん、まーちゃん」

笑う只野。

急に肩の力が抜ける真理子。

真理子「……はは、まーちゃんなんて久しぶりに呼ばれたわ」

○同・台所

真理子、冷蔵庫を漁っている。

真理子「何か……何か……ん？」
二人分のケーキ。

○同・ベランダ

二人、ケーキを食べている。

真理子、なぜケーキがおかれていたのか、腑に落ちない様子。

只野「ここから見ると、島は狭いわ。子ども
のころは広く感じてたんに」

真理子「ただちがでかくなつたんよ」
只野「よう一緒に神様を探しに森を探検し
つたなあ」

真理子「本物の神様を見つけたら、一つ願
いが叶うとか言つとつたけん。まるでシ
ェン

ロンや」
笑う二人。

只野「元気にしとつたか？」
真理子「うん。ただちかは？」

只野「ますます元気や」
真理子「店は儲けとるんか」

只野「さっぱりや」
真理子「うちもや」

再び笑う二人。

只野「やっぱり、厳しいんか」
真理子「まあな。でもまだ大丈夫や。20年
以上やつとる。簡単には潰さんよ」

只野「大切な店やもんな」

真理子「そうや。娘がまだ小さかったころ、うち離婚したやろ。一人で育てながら働かなきゃいかんってな。そげなときにここを見つけて。家と店が一緒やけん、離れずに働ける。すぐに買い取った」

只野「そうなんか。初めて聞いた」

真理子「ここを選んで正解やった。二人とも学校から帰ってくるとすぐ手伝ってくれたし、宿題もここでやって、喧嘩もようやとった」

只野「来るたびに騒がしかったわ」

真理子「今じゃ柚香と二人でバーバーを切り盛りするんだけど生きがいみたいなもんやしな」

真理子、笑う。

只野「素敵な話やな」

只野「只野、コホンと咳払いをして」

只野「そういや、柚香ちゃんはいくつや」

真理子「28」

只野「ずっとバーバーか？」

真理子「そうや」

只野「外に出んのか」

真理子「あの子はきつと、バーバーにいる方が幸せなんや」

只野「なんでや」

真理子「柚香はな、子どもんと全然変わらん。ずっとぼーっとしとる。何をしてても時間もかかり過ぎる。社会じゃそれでは通用せんやろ」

只野「そうか」

真理子「それにな、バーバー手伝つとるときあの子の顔が一番輝いとるんや。ただっこの頭よりもな」

只野「それはどうやろ」

真理子「なんや、自分の頭に自信あるんか」

只野「一番って言うのは、他を知らんだけかもしれないやろ」

真理子「もつと輝く瞬間があるか？」

只野「そうや。本当はもつとやりたいことがあるんかもしれん」

真理子「そうやるうか」
只野「もし柚香ちゃんが他にやりたいことがあるって言い出したらどうするん？」
真理子「それは……」
真理子「真理子、訝しげに只野を見つける。」
真理子「さつきから柚香のことばかり、何か企みよると？」
只野「いや、ははは。ちよつと気になってるだけや」
真理子「怪しすぎるわ」
只野「……実はこの間、柚香ちゃんと話したんや」
真理子「ほう」
只野「あの子は変わったよ。すっかりした大人になった」
真理子「うちにはまだ子供に見える」
只野「変わったよ」
真理子「ずつと近くで見えてきたんや」
只野「近くにすぎるとわからんこともあるんやないか」
真理子「……」

○同・台所（夕）

冷蔵庫の麦茶に手を伸ばす真理子。
やはり届かない。
真理子「こげんくらい、一人で……」
必死で取ろうとする。
後ろから柚香が麦茶を取る。
柚香「呼んでくれればいいんに」
真理子「……ありがとう」
柚香「商店行くけど、夕飯何がいい？」
真理子「あの、うちも一緒に行っていい？」
柚香「え？ よかけど」

○同・表（夕）

柚香と真理子、バーバーから出てくる。
柚香「どうしたん、急に」
真理子「久しぶりに外出たかったんよ」
二人、階段の上に到着。
柚香、真理子を車いすから抱きかかえ

て、階段を下っていく。
一歩ずつ、険しい顔で下っていく。

柚香「はぁ、はぁ、痛くない？」

真理子「うちは大丈夫や」

下まで到着。

真理子を下ろすと、戻って車いすを持つてくる。

息が上がる柚香。

真理子「悪いな」

柚香「こげん、なんてことなか」

柚香、再び真理子を抱き上げて車いすに乗せる。

柚香「ふう」

柚香、息を整えて、真理子の車いすを押す。

真理子「牡蠣剥きはどうや。うまくやっとなるか」

柚香「まだ全然早く剥けんわ。島田さんとかすごかよ。うちが1つやる間に10個は剥いとる。あれは神業やね」

真理子「続けられるんか」

柚香「まあな。やっぱりおかんは心配しすぎやったね」

笑う柚香。

真理子「他にやりたいことはないと？」

柚香「ん？」

真理子「例えば、柚香は絵がうまいやろ？ 絵を描く仕事とかやってみたいと思わんと？」

柚香「……とりあえず今は、おかんとおいしい夕飯を作りたいわ」

真理子「……」

すると雨が降って来る。

真理子「あ」

柚香「傘持って来とらん」

雨が次第に強くなる。

柚香「帰ろ」

真理子「あんた、一人で帰り」

柚香「え、おかんは」

真理子「うちを押しとったら遅いやろ。近く

で雨宿りしてから帰るけん」

周りに雨宿りする場所はない。雨がど
んどん強くなる。

柚香「どこに？」

真理子「はよ帰らんと風邪ひくよ！」

柚香「……わかった、傘持ってくるけん」

柚香、家へと向かう。

振り返ると、真理子が無抵抗に雨に打
たれている。

柚香「……」

柚香、戻って来る。

真理子「何しとると？」

柚香「よう考えたら、うちは馬鹿やけん。風

邪なんかひかんわ！」

柚香、真理子を押していく。

びしょ濡れになりながら、階段の下に
到着。

再び真理子をおぶって階段を上る。

柚香「なんや、おかん軽くなつたか？ ちゃ

んとご飯食べとるんか」

真理子「……食べとるわ」

○スナック『セピア』・店内（日変わり）

ソファで寝ている桃。

『ピコンピコン』とスマホの通知が鳴
り続けている。

桃「……ん？」

起きる桃。スマホを確認する。

○バーバーキリノ・柚香の部屋

パジャマ姿の柚香、お金を数えている。

柚香「あと5万……」

○同・台所

朝食の片付けをしている柚香と真理
子。

真理子「これ見て。パンクしよつたわ」

車いすのタイヤがペしやんこ。

柚香「あら、ほんとや、気付かんかった。代
わりのタイヤ、もらっとくわ」

真理子「ありがとう」
柚香「バーバーは順調？」
真理子「波留くんが大活躍や」
波留「波留、バスタオルをマントのように巻いて走ってくる。」
波留「うち、大活躍やろ！ 悪真理子のヒーローや！」
真理子「掃除とかしてくれとるんや」
柚香「あくまりこ……？」
真理子「ちよつと進化したんよ」
波留「悪魔と真理子で『あくまりこ』や！」
真理子「念願の名前入りや」
柚香「なんねそれ、名前が変わるなんてハマチみたいやね」
波留「ハマチ？」
柚香「ハマチってなあ、成長したら名前が変わって、ブリになるんよ。出世魚って言うて」
波留「ほー。なら悪真理子も出世魚や！ 成長しい！」
真理子「了解！」
波留「波留、走り去っていく。」
柚香「楽しかねえ」
真理子「……柚香」
柚香「なん？」
真理子「紙袋を取り出し、中から大量の書類をテーブルの上でドカッと置く。求人募集のチラシである。」
柚香「なんこれ」
真理子「あんな、うち考えたんよ。あんたがどうすればいいか」
柚香「チラシを手取る。」
真理子「好きな仕事を探さない」
柚香「……なんだよ」
真理子「それがあんなのためや。うちにはこげんことくらいしかできんけどな。理容師になりたいたんやったらそれもよか」
柚香「……もし理容師にならんかったら、バーバーはどうなるん？」
真理子「そげん人も来ん。最後は一人でどう

にかするわ」

柚香「それでよかと？」

真理子「まあ、店たたむことになっても、失業保険と障害者手当で悠々自適に暮らすことにするけん。あんたが心配することやなか」

真理子、去っていく。

パンクしたタイヤでゆっくりと進む、

小さな後ろ姿

柚香「……」

○港・波止場

柚香、一人でチラシを読んでいる。

事務や工場の仕事など様々な求人。

柚香「……」

携帯が鳴る。

柚香「桐野です」

学芸員「突然のお電話失礼します。私、東久

留米植物園の高橋というものです。が、桐野

柚香さんで間違いないですか？」

柚香「はい」

学芸員「イラスト、拝見しました。本当に素

敵で、感動しました！」

柚香「え？ イラストって」

学芸員「で、電話したのはですね、うちの植

物園で今度図鑑を出版するんですが、その

イラストを桐野さんに描いていただきたい

と思ってるんです」

柚香「……」

学芸員「興味ありますか？」

柚香「……まあ、でも」

学芸員「よかった！ 来月から来てもらって、

実際に植物を見てもらいながらスケッチし

ていただければ」

柚香「あの、まだやるとは」

学芸員「あ、そうですね。すみません、先

走ってしまい。桐野さんに描いてもらえる

と思ったら興奮しちゃって。とりあえず詳

細を書類で送りますので、それで判断して

いただければ」

柚香「：：わかりました」
柚香「電話を切る柚香。呆然としている。」
桃「お姉！」
柚香「慌てた様子でやって来る桃。」
桃「すごいことになったわ！」
柚香「何が？」
桃「お姉の絵をな、SNSに載せたらリアクションが来るわ来るわで。バズったんや」
柚香「バズ：：って何？」
桃「とにかく、お姉の絵がみんなに見られとるってことや」
柚香「ほんとかいな！」
桃「どっかの植物園からも連絡が来て、お姉の連絡先教えといたわ」
柚香「さっき電話来たよ。イラスト描いてほしいって」
桃「おお！お姉、これはすごいことやぞ！お姉の絵が仕事になるんや。たかさんの人に見てもらえるんや。夢が叶ったな！」
柚香「夢？」
桃「お姉、子どものころ、ずっと絵描きになりたいて言っとったやろ」
柚香「：：そうやったっけ」
桃「地面には大量のチラシ。」
柚香「何ね、これ」
桃「おかんが、仕事を探せて」
柚香「おかんが！？へえー」
桃「おかん、寂しそうやった」
桃「お姉は気にしすぎや。うちみたいにもつと凶太くなり」
柚香「うちは桃ちゃんとは違う」
桃「何が違うん？事故のことか」
柚香「そうや」
桃「お姉がずっとおかんの足にならんといけんわけやなか」
柚香「おかんはお茶も自分で取れんのか」
桃「あほか！甘えんない、できんもんはできん」
柚香「甘えやない、できんもんはできん」

桃「うちはな、昔っからあんたらのそういうところが好きや！」

桃、突然海に飛び込む。

柚香「何やっつとる!?」

バシヤバシヤと水しぶきをあげて暴れる桃。

柚香「泳げんやろ！」

柚香も飛び込み、桃のもとへ。

柚香「え……?」

すると桃、立ち泳ぎを始める。

桃「うち、泳げるようになったんよ。あれから練習したんや。わかるか? 出来んか? 助けてあげるんは優しさやない。出来るまで見守るんが優しさや。おかんとお姉は依存し合っつとるだけ。麦茶が取れん? 取れるところじゃあ、どうすればいいん」

柚香「……」

桃「このままやお姉とおかん、一緒に溺れるだけや」

柚香「じゃあ、どうすればいいん」

桃「3日後や」

柚香「何が」

桃「一緒に島を出るんや」

柚香「早いよ」

桃「うちはそげん甘くなか。これを逃したら一生このままやぞ」

柚香「……」

絵日記が遠い水面に浮かんでいる。

柚香「あ」

柚香「あ」

桃「お姉!」

桃、柚香を追う。

柚香の腕をつかむ。

柚香「絵日記が!」

桃「危ないけん!」

柚香「でもあれがないと」

絵日記、海へと沈んでいく。

柚香「……」

○牡蠣処理場・処理場（日変わり）

牡蠣剥きをしている剥き子たち。

柚香「あと5万：：あと5万：：」

作業は早くなっているが、牡蠣には傷がついている。

喜代「雑や！」

柚香「：：」

○バーキリノ・店内

真理子、高齢の客に抱えられ、脚立の上に乗ろうとしている。

真理子「すまん、もう少しや」

脚立の上に乗った瞬間、バランスが崩れる。

真理子「！」

○牡蠣処理場・処理場

柚香、素早く作業を続けている。

工藤「あんたのお母さん、ケガして病院に運

ばれたって。大事には至らなかったみたいやけど」

柚香「わかりました」

工藤「行ってあげたらどうや」

柚香「これ終わったら行くんで」

喜代「：：」

柚香、ナイフで手を切ってしまう。

柚香「あ」

血がどんどん流れてくる。

喜代「切ったと！？」

柚香、気を失う。

喜代「おい、大丈夫か！？」

他の剥き子たち、騒然。

○診療所・病室

簡易ベッドで横になっている柚香。手には包帯。

工藤が付き添っている。

工藤「よかったなあ。大事にならんで」

柚香「すみません」

工藤「クビや」

柚香「え……」

工藤「とんだ貧乏くじやったわ。仕事は遅い、怪我はする。手、切ってくれてよかつたわ、クビにする言い訳が出来たけん」

柚香「……」

工藤「あんた、どの仕事もうまくいかんやろうな。家の手伝いでもしとき」

そのとき、しきりのカーテンが開く。

真理子である。

真理子「あんたに柚香の何がわかるん？」

工藤「誰やあんた」

真理子「怪我したんはあんたの監督不行き届きやろうが。それに仕事が遅いんやない。丁寧なんや。そげなこともわからんのかこのボケが」

工藤「なんやと」

真理子「貧乏くじって言ったよな？ 柚香は

幸運くじや。勝利の女神や。四葉のクロイバーや。周りの人を幸せにできる子なんや。うちはずっと近くで見とった。あんたにはこの子の優しさがわからんのか！」

柚香「……」

柚香、涙があふれる。

工藤「だからなんや。そげなもん、仕事じゃ役に立たんわ」

工藤、去っていく。

真理子「なんね、あいつ」

柚香「おかん……ごめん」

柚香、泣きながら真理子に抱き着く。

柚香「おかんはうちのこと考えてくれとるのに、うちは自分のことばっか考えとった。

ごめんなさい」

真理子「謝ることなんてなかよ。安心しい。

おかんがおるけん」

真理子、柚香の背中をさする。

○バーバーキリノ・柚香の部屋（夕）

窓辺から外を見ている柚香。
木の上に鳥が見える。

柚香「コノハズクや」

ポシエットを探るが、絵日記はない。

柚香「……」

ベッドに寝転び、天井を見上げる。

○道路（二十年前・柚香の夢の中）

柚香（8）、真理子（32）と道を渡
っている。

遠くの方、ゲンが歩いている。

柚香「神様……？」

道路の真ん中で立ち止まる柚香、小
声で願いを唱える。

柚香「（小声で）ちゃんとした大人になりま
すようにちゃんとした大人になりますよう
に。ちゃんと……」

次の瞬間、軽トラが突っ込んでくる。

真理子が柚香をかばい、二人ははねら
れる。

○バーバーキリノ・表（日変わり）

翌朝。

玄関先で待っている柚香。

やってくる桃。

桃「おかんはまだ寝とる？」

柚香「うん、寝とるよ」

桃「荷物はどこや」

柚香、首を横に振り

柚香「ない」

桃「冗談はよか」

柚香「うち、残るわ」

桃「……おかんがおるからか」

柚香「そうや、うちが手伝わんと。あ、そう

や！うち、4月から理容師の学校に行く

んや。それでな、訪問理容っていう、客の

家に行つて髪を切るんや。そうすればお年

寄りが客になつてくれる。すごいやろ？」

桃「お姉はそれが嬉しいと？」

柚香「そうや」

桃「この嘘つき！」
柚香「……」
桃「もうわかった」
柚香「桃ちゃん？」
桃、バーバーに入っていく。
○同・柚香の部屋
桃「桃、やってきてダンスを漁り始める。」
柚香「何するん？」
桃「支度をする」
柚香「行けんって」
桃「うちがおかんの面倒見るから、お姉は出ていけ」
柚香「桃ちゃん……」
柚香「桃を止めようとする。」
桃「こうでもせんと、行かんやろ」
柚香「ここで満足しとる」
桃「嘘こけ」
柚香「嘘やない！」
桃、柚香を振り払う。
桃「そんなん変や」
柚香「そうや。変なんや。うちは変なんや。ぼーっとしとるし、仕事も遅い、牡蠣剥きもすぐクビになつた」
桃「そうやって、諦めるんか」
桃「お姉はたしかにちよつとぼーっとしとるところがある。うまくできんこともある。けど、やりたいこともあるやないか。なんに、嘘ついて逃げて、諦めんな！」
柚香「諦めるんやなかよ」
桃「なら何？」
柚香「おかんが桃ちゃんに厳しいのはなんでかわかるか？ 期待しとるからや」
桃「そんなわけな」
柚香「そうや。桃ちゃんは優しいし、度胸もある。頭もよか。期待せん方がおかしい」
桃「だからなに？」
柚香「うちもおかんと同じなんよ」
桃「……」

柚香「うちは桃ちゃんみたいに頑張れん。桃ちゃんはその代わり頑張りたい」

桃「……それ嘘」

柚香「……」

柚香「可哀そうやとか思ってたほしくない。うちはここで毎日めっちゃ充実してるん

や。この前なんてな、神様にも会ったんですよ。神様や。こげんにも楽しいことなか

桃「……何を言うてるんや、お姉」

柚香「桃ちゃんは何にも縛られたらいかん。島から出ていくんや。うちのらのために」

○港・波止場

港から離れていく連絡船。

甲板には桃と手を振る波留。

柚香、手を振って見送っている。

遠くなる連絡船。

喜代「おい」

柚香「へ？」

喜代「七輪で牡蠣を焼いている。

喜代「手は大丈夫か？」

柚香「ええ」

喜代「食ってけ」

柚香「いいんですか？」

喜代「売りもんになんねえやつだ」

柚香「なら」

柚香、七輪の前に座る。

連絡船から『ポー』と汽笛が鳴る。

柚香「この音、聞くと寂しくなるとです」

喜代「島から出たいと？」

柚香「どうですかね」

喜代「無理やり笑う柚香。

柚香「あ、焼けた」

柚香「ん？……あ、はい」

柚香、焼き牡蠣を食べる。

柚香「うまっ」

喜代「なんでうちが必死になって牡蠣を剥い

とると思う」

柚香「そりゃあ、こげん美味しい牡蠣を食べ

てもらうためやろ」
喜代「それもそうやけど、もっと根本の話や」

柚香「何ですか」

喜代「あんたらのためや」

柚香「うちら？」

喜代「うちは昔からずっと島で漁業やった。まあ、それ以外にこの島じゃ仕事がなかったんやけどな。若いころは両親を手伝うために牡蠣を剥いた。そんで子どもが出来てからは家族を養うために牡蠣を剥いたんや。そんなこんなしとつたら島から出ん人生になっとつた」

柚香「やけん、上手なんやね」

喜代「馬鹿。うちの人生はしようもない」

柚香「何を言うと！ そげなわけ」

喜代「絵描きになりたかったんや」

柚香「……」

喜代「これでも中学までは得意やったんや。それで高校は美術の学校に行きたいって親に言ったんやけど、すぐ働かんといけんって言われてな、無理やった。それから50年描いてなかったら、ほれ、そげん具合になつた」

地面に落ちているハンドブック。

くしゃくしゃになつたムキ子。

柚香「……」

喜代「あんたはうちみたいになるな。時代は変わったんや。チャンスはきつとある」

喜代、包帯がまかれた柚香の右手を手に取り

喜代「うちも若いころはあんたと一緒に何度も手を切つた」

喜代の手、ボロボロになっている。

喜代「本当はこの手を絵の具で汚したかったなあ」

笑う喜代。

柚香「……」

連絡船の汽笛が遠くの方から聞こえる。

○バーキリノ・表
柚香、ポストを見ると、植物園から封筒が届いている。

○同・柚香の部屋
柚香、書類を見ている。
柚香、ぼろぼろと涙が流れる。
柚香「うちやって……諦めたくないんや……諦めたくない……」

○同・廊下
真理子、ドアの前で聞いていた。
手には理容専門学校の入学案内。
真理子「……」

○同・柚香の部屋（夜）
ベッドで寝ている柚香。
外は暴風雨。木々が激しく揺れている。
柚香、むくっと起きて、外を見つめる。

○同・表（夜）
合羽を着た柚香、出てくる。
嵐の中、森の中へ。

○森・祠（夜）
やってくる柚香。
ゲン、祠の中で雨風をしのいでいる。
柚香「あの、大丈夫ですか？」
ゲン「え、柚香さん？ どうしてここが」
柚香「あ、いや、ちよつと」
柚香、持ってきた合羽をゲンに渡す。
柚香「これ、よければ」
ゲン「ありがとう、気が利くんやね」
ゲン、合羽をかぶる。
ゲン「中入る？ 狭いけど」
柚香「失礼します」
柚香、祠の中へ。

柚香「……あの」
ゲン「うん？」
柚香「ゲンさんって神様ですか？」
ゲン「きみはそう思うんやろ？」
柚香「そうや」
ゲン「ならそれでよか」
柚香「そうなんや、へへ」
ゲン「何が可笑いん？」
柚香「なんや、神様ってこげん近くにおった
んやな。みんなお祈りはするのに、気付い
とらん。ちよつと可笑しいんや」
ゲン「普通の大人には、僕はただの浮浪者と
しか見えんけん。きみは違う」
柚香「何が違うん？」
ゲン「きみは子どもや」
柚香「なんや、嬉しくない」
ゲン「この世界をちゃんと楽しもうとしてい
る」
柚香「雨が祠を叩きつける。
……あの、願い事って本当に叶えられ
るんですか？」
ゲン「確かめたいなら、願ってみい」
柚香「……」
ゲン「どうした」
柚香「明日は晴れてほしいとです」
ゲン「なんでなん」
柚香「明日も雨やと、ゲンさん、可哀そうや
し」
ゲン「……きみはやっぱり珍しかね」
ゲン「……供え物のカップ酒を飲む。
願いつていうのはね、みんな自分の幸
せを祈るもんや」
柚香「うん」
ゲン「きみのお母さんはきみがバーバーにい
れば幸せになれると思ってる。妹さんは
島の外にでればきみが幸せになれると思っ
ているね。きみはどう思う？」
柚香「そげんこと、わからん。考えたことも
ない」
ゲン「僕は子どものころからきみを見てい

た。きみはもうわかつとる」

柚香「…：そうかいな」

柚香「柚香、ゲンのカップ酒を飲む。」

柚香「そんで、結局願いは叶えられるん？」

ゲン「叶えられるよ」

柚香「嘘や。うちの願いは叶わなかった」

ゲン「え…：」

ゲン「ゲン、柚香の顔をじつと見て

ゲン「ああ！ 『しつかりものになりたい』

って言ってた」

柚香「そうや。全然しつかりなつとらん」

ゲン「なるほどなるほど。たしかにあのとき

きみは願っていたね」

柚香「そうや。なんでや！ どうなつとるん

や！」

ゲン「落ち着いて。まず、願いを叶えるには

ルールがあります」

柚香「ルール？」

ゲン「ゲン、仰々しく咳ばらいをし

ゲン「一、他人を不幸にする願いは叶えられ

ません」

柚香「うん」

ゲン「二、生き物は蘇られません」

柚香「うん、大丈夫や」

ゲン「三、二人以上同時に願ったら叶いませ

ん」

柚香「うん…：二人？」

○同・祠（朝）

快晴である。

柚香、目を覚ます。

辺りを見回すが、ゲンはいない。

手の包帯がめくれている、怪我が治っ

ている。

○バーバーキリノ・真理子の部屋

真理子も起床。

○同・台所

冷蔵庫を開ける真理子。

真理子 「麦茶に手が届かない。
返事がない。」

○同・ 柚香の部屋
真理子 「ドアを開けて中を覗く真理子。
「柚香？」

× × ×
柚香を探し回る。
真理子 「トイレ、お風呂、クローゼットまで。
「柚香……！」
悲壮な表情。」

○同・ 表
真理子 「バーバーキリノから出てくる真理子。
「神様……神様……」
階段の上までやって来る。
下を覗く。傾斜が急である。

真理子 「（ゴクリッ）……」
ゆっくりとタイヤを前に進める。手は
汗ばんでいる。
段差に差し掛かる。

真理子 「……」
慎重にタイヤを回す。
「が、踏み外す。」

真理子 「きゃー！」
階段を勢いよく落ちていく真理子。
もう自分では制御できない。目をつぶ
る。
ドンツと道路に落下。

真理子 「……」
ゆっくりと目を開けると、車いすは奇
跡的に立っている。

真理子 「……ふう」
顔を上げると目の前にゲンの姿。
ゲン 「柚香さん、探します？」
真理子 「え？ ……ええ」
ゲン 「さっき裏手の森ですれ違いましたよ。
そろそろ帰ってくるんじゃないかな」

真理子 「……ありがとうございます」

真理子、不審に思いながらも家へ帰ろうとする。

真理子「あの、どちらさま？」
振り返ると、誰もいない。

真理子「？」
気を取り直して引き返そうとするが、上り階段。

真理子「あ……」

○ 只野なんでも屋・表

只野、相変わらずぎこちなく踊っている。

やってくる柚香。

只野「おはよう」

柚香「おはようございます。おかんと話しくれました？」

只野「おう」

柚香「おお！ どうやった？」

只野「ニヤニヤする柚香。」

只野「なんでニヤついとるん？」

柚香「なんでもなか」

只野「……それなんやけどな、おかんの気持ちちはようわかった。でもな、この仕事は受けられん」

柚香「なんでよ？」

只野「柚香ちゃん、きみは優しいけん。おかんなを傷つけたくないのはようわかる。けどな、これは自分で聞かんといかん。やりたいうことをやるというのはそういうことや」

柚香「違う」

只野「違わん。時には人を傷つけても自分の気持ち貫かないといかん時がある」

柚香「うちが只野さんに頼んだのは、只野さんとおかんが話してほしかったからです」

只野「……は？」

柚香「うちのおかん、どうやった？」

柚香「あーもう、鈍感やね。まあよか、また

バーバー来てくたさいね」
去っていく柚香。

只野「……なんやね」

○バーバキリノ・表

自宅へと向かう柚香。

道の向こうに真理子の姿。

柚香「おかん……？」

急いで駆け寄る。

柚香「おかん！？」

耳を顔に近づけると、スースーと寝息

が聞こえる。

ほっと胸をなでおろす柚香。

柚香「なんや……？」

× × ×

雨が降ってくる。

雨つぶが真理子の顔に当たる。

真理子「うん……？」

目を覚ますと、ブランケットがかけら

れている。

真理子「？」

隣には車いすに寄りかかって寝ている

柚香。

真理子「（微笑みを浮かべ）……」

柚香も目を覚ます。

柚香「ん……あ、雨や！ おかん、起き！」

真理子「起きとる」

柚香「帰るよ」

真理子「ちよつと待って」

柚香「？」

梅の花が雨粒に濡れている。

真理子「梅がきれいや。輝いとる」

柚香「ほんとやねえ」

真理子「柚香が最初に見せてくれた絵日記、

覚えとるか」

柚香「梅の花やった。ちよつどこの時期や」

真理子「事故のすぐあとやった」

柚香「……」

真理子「絵日記、うちが歩けんくなつたけ

ん、描いてくれたんよな。うちの代わりに

島中いろんなところに行つて、いろんな景

色を描いて、毎日見せてくれてな」

柚香「最近見せとらんね」

真理子「絵を描くんは好きか」

柚香「一番好きや」

真理子「それはよか」

真理子「雨がポツポツ二人にあたる。

柚香「絵描きになりたいんやな」

真理子「机の上に紙が置いてあったわ」

柚香「あちやあ」

真理子「見たいもんを見なさい。行きたいと

ころに行きなさい。やりたいことをやりな

さい」

柚香「でも、おかんの足は」

真理子「あの事故な、うちのせいや」

柚香「……」

真理子「あんどき、柚香が道の真ん中で何か

に夢中になつとるのをわかつとつた。やけ

ど、何も注意せんかつた。それどころか、

ずつと何かに夢中になつてほしいつて願つ

とつたんよ。うちのせいや」

柚香「……」

真理子「あの事故から、どうすれば柚香を守

れるかばかり考えてしまつた。もう走つて

守りに行けんけん。心配で心配で。桃の言

う通り、過保護だつたんやろうな」

柚香「それはうちがボ―つとしとるけん」

真理子「でもな、それはうちがもともと願つ

ていたことやつた。すごかことなんや。周

りは子どもみたいつて言うかもしれんけど

な、それは嫉妬や」

柚香「……」

真理子「柚香はうちのことを幸せにしてくれ

た。今度はもっと多くの人を幸せにしてあ

げんしやい」

柚香「……うん」

柚香、真理子を抱きしめる。

○同・洗面所

髪を拭いている柚香。

電話が鳴り、取りに行く。

○同・廊下

柚香、受話器を取る。

柚香「はい、こちらバーバー」

桃の声「お姉」

柚香「桃ちゃん？」

桃の声「うん」

桃の声、震えている。

柚香「どうしたと？ 大丈夫？」

桃の声「お金……貸してもらえんやろう

か？」

柚香「お金？ いくら？」

桃の声「五十万くらい」

柚香「……わかった」

桃の声「……すまん」

電話が切れる。

真理子、やって来る。

真理子「どうしたと？」

柚香「桃ちゃんのとこ、行ってくる！」

真理子「桃？」

柚香、急いで自分の部屋へ。

○同・柚香の部屋（夜）

柚香、タンスからお金の入った封筒を

取り出す。

柚香「……」

ポケットに突っ込む。

○道（夕）

柚香、全力疾走で港へ。

○港・連絡船乗り場（夕）

急いで連絡船に飛び乗る。

すぐに出港する。ギリギリだった。

膝に手をつく柚香。

○桃の自宅アパート・通路（夜）

ボロボロのアパート。

柚香、『桐野』の表札を見つける。

柚香「ここや……」

インターホンを押す柚香。

柚香「桃ちゃん！」

桃「桃が出てくる。」

桃「お姉、インターホンの意味がなかよ」

と笑う桃。

柚香「大丈夫？」

桃「うん、ありがとな」

○同・リビング（夜）

がらんとした和室。食卓とゴミ箱くら

いしか置かれていない。

布団では波留が寝ている。

○同・ベランダ（夜）

桃と柚香、話している。

柚香「波留くんのお父さん？」

桃「そうや、一週間前に一緒に暮らそうって

連絡が来たんやけど。実際は別に家庭があ

ったっていうオチや」

柚香「悪か人もいるもんや」

桃「金、全部持ってかれた。慰謝料払わんと

いかんとかほぎよって」

柚香「：：：難しいことはようわからんけど」

柚香「封筒を桃に渡す。」

柚香「これ、50万くらいはあるけん」

桃「：：：」

桃「桃、受け取る。」

桃「うち、かっこ悪いやろ」

柚香「なにがよ」

桃「あんなにお姉に偉そうなこと言っとい

て、結局頼っとる」

柚香「そげんよかよ」

桃「おかんの言う通りやったのかもなあ。大

人しくバーバーを継いどけば。：：：子供ひ

とりまともに育てられん」

柚香「：：：」

○同・片付け作業の点描

三人、家具や家電を段ボールに詰め込
んでいく。

× × ×
柚香と桃、家具を家の外に移動させている。

波留、二人を応援している。

× × ×
何も無くなった部屋。

○連絡船・客室

海を渡る連絡船。

景色を見ている三人。

波留、動物のイラストが描かれたクッキーを食べている。

柚香「それ何？」

波留「動物クッキー。勝負しよ」

柚香「勝負？」

波留「ひとつ取って」

と、お菓子の箱を差し出す。

柚香、箱の中に手を入れてクッキーを一枚取り出す。キリンである。

波留「キリンな」

波留も一枚取り出す。カバである。

波留「カバや。カバは最強やけん。うちの勝ち」

柚香「えーなにそれ」

波留、二枚クッキーを食べる。

波留「次の勝負な」

波留、嬉しそうにシャッフルする。

桃「こういうの見たとき、何が楽しいかわからんよな」

柚香「えー楽しかよ」

二人、もう一度選ぶ。

波留「柚香はカニで、うちはサル。カニはサルに食べられるけん、うちの勝ち」

波留、二人分のクッキーを食べようとす。

柚香「ずるいわー」

うなだれる柚香。

波留「：：」

波留、一枚を柚香に渡す。

波留「楽しかったけん」

柚香「いいと？」

波留「よか」

柚香「優しいなあ、波留くんは。きっと育ててくれた人が優しいけんね」

桃「……」

桃、涙が溢れてくる。

隠すように外を見る。

柚香「桃ちゃん？」

桃「お姉はさ……やっぱ変やね。うちは……」

なんや、嬉しいわ

柚香「……なんねそれ」

連絡船は島へと進んでいく。

○バーバキリノ・表

数日後。

桃と只野、階段脇の斜面をシャベルで掘っている。

桃「なんでうちがこんな重労働……」

只野「お金足りん分はしっかり働いでもらわんと」

桃「ケチ……」

真理子と波留、やってきて

波留「麦茶いる人……」

桃「くれ！」

波留「冷蔵庫にあるよ」

桃「はあ？ 持って来とらんと！？」

真理子「桃、お願いがあるんやけど」

桃「何よ」

真理子「髪が伸びてきたけん」

桃「お、切ってやろうか」

只野「桃ちゃん子供のころ、まーちゃんを坊

主にさせよったな」

桃「またやったるか」

真理子「やめい」

笑う一同。

○同・柚香の部屋

柚香、荷物をリュックにまとめている。

部屋にはもう何もない。

柚香「よし」

○同・台所

真理子、腰の下に台を置き、麦茶に手を伸ばす。簡単に取れる。
荷物を持った柚香、やって来る。

真理子「大丈夫？」

柚香「うん、全部持った」

真理子「よし」

真理子、柚香を抱きしめる。

真理子「柚香は何があっても大丈夫。きっと

神様がついとる」

柚香「ありがとう。おかんも元気でね」

柚香、玄関へ向かい、出ていく。

真理子「（小声で）頼んだぞ、神様」

○同・柚香の部屋

入って来る真理子。

がらんとした部屋を見回す。

桃の声「あつー！」

桃も台所にやって来て麦茶を飲む。

桃「何やっとな？」

真理子「忘れもんチェックや」

桃「相変わらず過保護やな」

真理子「最後までいいよかやる」

窓辺に、海に沈んだはずの絵日記が置かれてる。

真理子「？」

○同・ベランダ

真理子と桃、絵日記を読む。

『3月10日 波留くんはおかんのことを「あくまりこ」と呼んでいる。おかんが成長すると名前が変わるらしい。おもしろか』

文章の横にイラストが描かれている。

魚の体に真理子の顔。題名は『出世魚

真理子』。

桃「何やね、これ」

クスッと笑う二人。

ページをめくっていく。

『3月7日 桃ちゃんは帰って来ない。きつと自由気ままに空でも飛んでるんやろう』

横に顔が桃の鳥のイラスト。題名は

『渡り鳥の桃ちゃん』。

桃「ほんと、変わったるな」

真理子「愉快やわ」

ページをめくっていく。

幻想的な色合いの葉っぱ。

燃えるように鮮やかなツバキ。

うさが跳ねているような波。

喜代のボロボロの手。絵の具で色鮮やかに汚れているよう。

真理子「……」

二人、顔を上げる。

目の前の景色がイラストのように色鮮やかに広がる。

桃「うわあ……」

真理子「すごか……」

○同・表

玄関から飛び出してくる真理子と桃。

二人、お互いを見る。

二人の目には真理子は魚、桃は鳥のように見えるのである。

笑ってしまふ二人。

桃「何やね、それ」

真理子「そっちこそ」

玄関先の野良猫はイラストのように映り、只野の体はカニになる。花も葉っぱも全て鮮やか。

桃「お姉はすごか……すごかよ」

只野「どうしたんや」

真理子「柚香は？」

只野「もう行ったわ」

○港・連絡船乗り場

連絡船、出港間際。

柚香、乗り込もうとしている。

桃、走ってやって来る。真理子も只野に押されてやって来る。波留、ギャーギャー騒ぎながらやってくる。

桃「お姉！」

柚香「ありや、どうしたん？」

真理子「これ、忘れとる」

と、絵日記を柚香に渡す。

受け取る柚香。

柚香「ありがとう」

真理子「これは、変わらずに描いてくれ。そ

んで帰って来たから見せとくれ」

柚香「わかった。描き続けるよ。ずっと描き

続ける」

柚香、連絡船に乗り込む。

連絡船、出港する。

桃、手を振って

桃「お姉はどこにいても幸せを見つけれ

る。うちが保証する。だって、幸せはお姉

の中にあるんやけん」

柚香、手を振り返す。

喜代もやってくる。

全員で柚香を見送っている。

柚香、もつと大きく手を振る。

波止場にはゲン。手を振っている。

潮風が柚香の髪を揺らす。

汽笛がポーンと鳴る。

柚香「ええ音や……」

連絡船は島から遠ざかっていく。

了